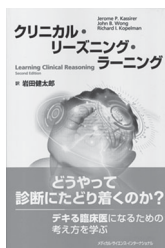


書評

[評者]

徳田安春

筑波大学附属水戸地域医療
教育センター 水戸協同病
院総合診療科



クリニカル・リーズニング・ラーニング

岩田健太郎 訳

Jerome P. Kassirer・John B. Wong・
Richard I. Kopelman 著

A5変 頁442 図17 2011年
定価4,830円(本体4,600円+税5%)
ISBN978-4-89592-687-4
MEDSi刊

20年近く前に本書(原書)の第一版を購入し繰り返し読み、以来長年にわたり研修医教育にも利用していた。症例集がついているので、沖縄県立中部病院勤務時代はこれを利用して総合内科レジデントを集めてグループ学習を行い、臨床推論トレーニングを楽しんでいたことを思い出す。臨床推論の分野では本書に並ぶ教科書は無い。最近第2版がでて、認知科学と心理学からインプットされたさまざまな新しい理論(説)も追加され、症例集も補充されており、充実した内容に感心していた。そんなとき本書の翻訳版が出た。

本書は岩田健太郎氏がなんと「独りで」翻訳を担当したとのこと。本書の大ファンとしては、岩田氏が翻訳してくれてとてもうれしい。翻訳ではあるが、それでも岩田流口語調のモダンな言い回しがいつものテンポで展開されて読みやすい。翻訳書でこれほど読みやすい文章となっていることは誠に驚きである。

これまでは原書であったため、わが国では一部の熱心な指導医が隠れて読むという密書的存在であった。日本語版が出版された今、本書はわが国の研修医と指導医にとり必読書となるであろう。指導医がいなくても、医学生やレジデントは、症例集を利用してグループ学習を行うことにより、臨床推論のトレーニングを行うことができる。

クリニカルリーズニングは臨床医にとり最も重要なスキルである。本書の著者の1人であるKassirerは、1970年代から医学教育におけるクリニカルリーズニングスキルの重要性に注目し、1980年代になり Hos-

pital Practice という雑誌に Clinical Problem-Solving の症例検討シリーズの連載を始めていた。Kassirerは、New England Journal of Medicine の編集長になり、1992年から毎月1回程度の頻度でこのシリーズの連載を継続し人気シリーズとなった。その後、TierneyやSaintらがこのシリーズを引き継いで、現在でも超人気のシリーズとして続いている。人気の秘密は固定ファンが多いということであり、指導医となってもこのシリーズだけは必ず目を通すという医師が多い。本書のなかでも「継続は力なり」と述べられている通り、診断推論の学習は生涯学習として取り組むべきである。

最近ではわが国でも「臨床推論」の教育の重要性が意識されるようになり、野口善令氏らの診断学の書籍(誰も教えてくれなかった診断学/医学書院刊)が好評を得ると、いまや全国の臨床教育現場では「臨床推論ブーム」といってもよい状況となっている。ただし、「クリニカルリーズニング学で理論さえ身につければ臨床医学と臨床推論の学習を修了したことになる」ということにはならない。このことは、本書のなかで繰り返し指摘されている。答えは本書の序文の最後のパラグラフにある。3人の著者による次の文章である。

「臨床医学を学んだり教えたりする最良の方法はほとんど症例を経験することだと我々は信じる。臨床推論を学ぶ最良の方法は、たくさんのかっこいい、あるいはいまいちな推論の実例に、熟練した医師のスーパービジョンのもとでさらされることだと信じる。」